

## 日本の楽園・舢倉島

藤田宏三

まえがき——裏日本における最大の半島—能登半島は陸の孤島と云われている。即ち、能登は遠く日本海に突き出て三方が海であり、又、宝達山、石動山が陸の交通を遮断し、その奥行きは極めて深い。この地理的条件により早くから海外との交渉があり、異国の文化を受け入れて独自の文化を形成したように思われる。これが能登半島が陸の孤島と呼ばれる所以であり、しかもその奥行きが深い故にその文化的恩恵は極めて薄く「日本の秘境」とも云われている。

この特異なる存在である能登半島の最北端に輪島市がある。輪島は早くから港として開け、名産の漆器は有名であり、日本水泳界のホープ山中、大崎選手を生んだ所でもある。さらに輪島より海上四十八軒程北に絶海の孤島「舢倉島」がある。我国の陸の孤島「能登半島」からさらに海上遠く離れた別天地「舢倉島」に興味をもつのは私一人ではないだろう。

私が「能登」について述べたのは「能登を語らずして舢倉島を語り得ない」ほど両者は関係が深いからであり、この事は私の説明を要しないであろう。

私が以下述べる事は舢倉島の産業、宗教、教育といった学問的立場からではなく、私がその島へいつか感じた事、見た事、知った事を述べて、舢倉島を多少とも、理解していただきたいと思つたからである。又機会があれば諸兄に行かぬ事をお進めする。この矢に於て私が徒々に書いた、記録とも日記ともつかぬ雑記帖から採らない文章の一部を出来るだけ原文のまま、諸兄に被露する所以がある。

8月4日晴 午前9時、晴天に恵まれて、輪島港より今年6月に就航した観光船（50トン）に乗る。船賃は往復200円。舢倉島迄大体三時間かゝるそうだ。この一週間ほどは全くの晴天続きである。何一つ日陰のない船上でざらざらする日光を避けるのに一苦勞する。同乗者は50名程で、その半数以上は観光客（と云つても全んどは近郷の人らしい）で、肉身に会いに行く者、友人に会いに行く者も二、三いる様だ。

出航して1時間半程で輪島と舢倉島のほぼ中間に存在する「セツ島」の側を通る。同乗者の年寄の話でこの島にも人が住んでいる事が判る。この島には水がな

いので、雨水又は、船倉島からの補給に頼っているそうである。人間住む気さえあれば何処でも住めるものだ。七ツ島から1時間、前方に気をつけていた私の目は水平線上の黒い線状のものに止まる。土地の人が「島が見えた」と大声で云う。私の見た線状のものが「船倉島」らしい。ここに来る前調べておいた「島の平均海抜ノ4米」は本当らしい。さらに30分、私の時計は12時少し前を指している。この時はもう大体島の形がはつきりとして来た。島の中央部に白い塔みたいな物がある。灯台だろう。船の1つれ毎に島に近づいて行く。もう500米はないだろう。島もはつきりとして来た。真新しい突堤、その上にうごめく人の影。見た所上等とは云えぬ家々等が目につく。急にエンジンが止まり、ゆつくりと島に近づいて行く。突堤の上の人の顔がはつきりとして来た。子供が全んどだ。男の子幼児は上半身裸だ。口々に何にか叫んでいる。「ガタン」と大きくゆれた船は突堤に着いた。人は我先に降りる。私も不安と好奇の念を持って島の土を踏んだ。島の中央部、灯台と並んで学校らしき建物がある。そこに行くことにする。長い突堤を歩きながら島の中を見る。木は全んどない。目につくのは多くの船と、石を屋根にのせた家（見かけはみすばらしいがしつかりした建物）である。やがて「拳大」の石がごろごろした道に出る。土なんて見えぬ。全く歩きにくい。200米程歩いてやつと学校に着く。もう船に乗っていた人々は思い思いに散っていない。旅館に入る者、休憩所に行く者、灯台に行くもの等多様。学校には子供達が、5、6名あそんでいる。見なれぬ外来者（私）に気がつき、じつとこちらを見つめている。校舎に入って先生に逢った。幸い泊めてくれる事になった。一安心して校庭に出て港の方を見る。学校は小高い所にあるのでよく見える。二段になった白い突堤、そこに横たわる観光船。はるか彼方に七ツ島が見える。こゝからは立山連峰も見えるそうである。

私は遅い昼食の準備（と云つても湯を沸かすだけだが）をする。子供達はいつの間にか1、2、3名に増えている。うさんくさそうに私を見ている。私が話しかける。すると子供達は黙つて顔を見合わせるだけ。沈黙である。その気ならと私はラジユースを出し操作を初める。子供達はラジユースを初めて見るのだろう。いつの間にか寄つて来て口々に何か云い出す。私が説明してやると黙つて聞いている。やや、なついて来た様子だ。あわてることはない。私はさつさと食事を終る。子供達は速くから時々私の方を見る。今日は別にすることは無いが、島の様子を早く知りたいので島を見物する事にする。学校のすぐ後の灯台に行く。入るのは明日にしよう。灯台を過ぎて50米、もう反対側の海辺だ。こちらは港の方と違つ

て岩がごつごつし、さり立っている。水はきれいだ。これで一通り島の様子判る。それほど島は遙く小さいのだ。

早い夕食をすませてさつさと帰る。子供達は我家で食事をすませて又学校へ来る。外来者が何にをするのか興味がある様だったが私が帰ってしまったのであきらめて帰ってしまった。空一面の星空がきれいだ。明日も天気だろう。8月5日晴

朝7時に起きる。教室の窓から小さい頭が見える。子供達だ。早速食事の準備に掛る。水は学校の隣の駐在さんの家から分けてもらった。駐在さんは50年配の人が/人いるさりだ。食事をすませて島の人の話を聞く為には各家をまわる。相手にされない。忙しいのだ。話をするひまはないのだろう。仕方がないので子供達から話を聞く事にする。学校に戻り、乗っている子供達の所へ行く。黙ってこちらをみている。

子供の喜びそうな話題を探す。「テレビある？」この向に対し、子供達は口々に「ないけど組合でみる」と答えてくれた。「組合に」この向に対して中学1年位の男の子が答えてくれた。話しによると組合が自家発電している。テレビは組合に一台しかないそうである。この様にして子供達の話から大体次の様な事が判る。

海女は20年程潜る。今迄の海女の夏期の収入で生活していたが生活水準向上と収穫減少の為冬、岩ノリ採集、出稼ぎで賂なうてゐる。ラジオは各家庭にある。又、冬期、比較的、雪は少なく、遊びは泳ぐ事で、時々バレーボール、ソフトボール、卓球等をする。そう云えば学校は立派なもので雨天体操場まである。しかし技術は下手いそうだ。

海士は冬でも大半が島に残り、生徒も200名中50名程残る。尚もなく子供達は昼食の為に帰ってしまった。先生が校庭に出て来た。今度は先生と話をする。教育については次の事が判る。総じて女子の方が活発である。これはこの島の特異性の一つで戦前迄は女子の権利が強く戦後やつと男女平等になった。現在でも女子が生まれると「赤飯」を炊いてお祝いする。生徒数は200名前後でその中、50名が中学生である。土地の人は教育に関心がうすく、中学二、三年になると出席状態が悪くなり、生徒の程度も低い。本も少く設備もよくない。この島にも辺地の欠点があらわれている。

午後になつて私は島をまわつて見る気になつた。周り1000K.M. この絶海の孤島にも(本によると昆虫等はいないそうだが)トンボ、蝶々、イナゴ、バツタ等がいる。島のどこから見ても灯台が見える。石と岩場が多くて歩きにくい。所

々に神社らしいものがある。帰つたら子供達が待つてるだろう。子供達から祭の話でもきこう。案の上、子供達が待つていた。わずか一日足らずでもう子供達と友達になつてしまった。何処でも子供は人見知りをしなれないものだ。子供達の口から次の様な事が判る。祭は8月30日、31日で盆と一緒に「奥平日咩」をまつるのだそうだ。出し物は昼は「おみこし」夜は「キリコ(奉燈)」で紛装は女の人の姿をする。おみこしは毎の中まで入つていつて綱を引くのだそうだ。これは「海女の命づなを持つ」事をあらわしている。神社は一つ一つ神が違い、金比羅、弁天、竜神等があり、竜神祭は年2回でこの時は誰も海に入らない。(注: 竜神の池に關する話——享保10年8月或日、一旭和尚が海女人達を觀音堂に集め布教をして居る時、竜神が現われ、「吾れは此の前の池に住む竜神なるも不幸な事が起り、今池の底に死体となつて居る。養糧の力で供養してほしい」と言われたので、一旭和尚は海士達を乗せ、池の水をくみ出し、その死体を取り出し、池の中央にお堂を立ておまつりした。其後、弘化3年1月5日輪島の法藏寺に其の遺体を移し毎年1月15日法藏寺で法要が行われる)

又、子供達の話から新に「みちやくせく」という一種(足入れ船)が未だ残つて居るらしい事、海女は50才位でも潜り、貝類(サバエ、アロビ)、たこ等を取り、漁業は6、7月頃とび魚、8月頃から「タイ」が盛んになる。8月6日晴今日はもう島とお別れの日だ。観光客は大抵日帰りで私の様に泊る人は珍らしいしかし私は泊まつたお蔭で種々の事が判つて来た。

島には大きな「カ」が居り、外来者にはいやな奴だ。島には水が豊富にある。海女が色黒のたくましい体をまわし一つになつて水を浴びている様はせらしさはなく、たくましく生きていく一人の人間の素朴な姿をそこに見出す。名前は「舟見、船体、船坂、磯野、浦見」等海に關連した名が多い。船は冬でも少くとも10日に一度は島に来る。島民の食糧は各自、貯ててある様だ。島の人言葉はせつかりで判りにくい。京都の話には目を輝やかせる。又、島内には部落が分れて居り、「木村、出村、西村、小岩、北村、三軒家、大和田」の七つがある。これらはお互いに競争し合うが肉親の様に仲が良い。

午後二時半、船が出る時刻だ。もつと居りたい、もつと知りたい、しかし予定がある。でせうも行かない。又、改めて来る事にしよう。今度来る時は一週間位の予定で.....、二時半きつかり、船は出る。子供達が手を乗つて居る。私も手を振る。わずか2日程の滞在だが私には思い出の一コマだ。

島がだんだん小さくやがて海の中へ消えてしまつた。私は次の目的地「能登金

剛」に思いをはせた。

〔あとがき〕—私の雑記帖は当時書いたものなので少し判りにくい矣はあつたと思いますが、これを読まれた皆様に何か印象に残つたものがあるれば、私に取つて誠にうれしい事であり、この記をお見せした目的の大半は達せられた訳です。

皆様は「離島振興法（昭和28年法律オ72号）」を御存じだろうか。この法により離島振興対策審議会がある。しかし実質的な活動はどうか。私達が実際にその地に赴き、その島の実状を知り、離島振興に一役買えんとすれば離島調査の成果は十数と云える。少くとも細倉島の場合、その恩恵がなかつたと見受けるがどうだろうか。皆様が行つてその回答を出して下さい。

なお、同行者として、藤田享士（エ3）、池田一也（法2）、浦上尚祐（商1）の三君の参加があつた事を附記してこの記の終りとする。

文房具 事務用品一式 バッチ  
バックル ペナント 化粧品 三割引

関大指定

フジヤ文具店

関大正門前

TEL (38) 2934  
4805